

## 桜庭一樹によるジェンダーの（脱）構築： 『GOSICK』の主人公を中心に

マルチンス, ラファエル ビニシウス  
九州大学大学院地球社会統合科学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/2320100>

---

出版情報：九大日文. 32, pp.53-63, 2018-10-01. 九州大学日本語文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 桜庭一樹によるジェンダーの

## (脱)構築

——『GOSICK』の主人公を中心に——

MARTINS マルチンス Rafael ラファエル Vinicius ヴィニシウス

### 一 はじめに

二〇〇八年に父娘相姦を素材とした小説『私の男』(文藝春秋、二〇〇七年十月)で第一三八回直木賞を受賞した桜庭一樹は、『私の男』を含め、少女像の独自性によって高く評価されている<sup>①</sup>。桜庭は一九九六年から二〇〇二年にかけて山田桜丸という男性名義で、ゲームのシナリオとゲームのノベライズ版の作家として活動した。その間、二〇〇〇年に『AD2015 隔離都市 ロンリネス・ガーディアン』という作品で、少年向けライトノベルの作者「桜庭一樹」として、ここでも男性名を用いてデビューした。初期の作品では作者は「性別不明」として紹介されていたが、『B-EDGE AGE 獅子たちはアリスの庭に』(富士見ミステリー文庫)、富士見書房、二〇〇二年七月)の作者紹介ページで女性作者としてカミングアウトした。

ライトノベルを含むオタク文化<sup>②</sup>あるいは若者文化は、対象読者・視聴者の年齢や性別を基盤にしている。ライトノベルで

あれ、マンガであれ、対象読者を示す「少年」「少女」「青年」という種類に分けられる。それに従って、少年向けレーベルから出版された作品は、その対象とされる男性読者の欲望を満足させる物語性やキャラクター構造を持つことが当然だと一般的に考えられている。ライトノベルが定着したゼロ年代のオタク文化において、その欲望は「萌え」<sup>③</sup>という形をとったと思われる<sup>④</sup>。そのため、少年向けのライトノベルにおいて、魅力的な少女キャラクターは一般的なものである。そうした魅力的な少女キャラクターが溢れる環境の中でも、桜庭の少女像は何故か特に注目を集めた。

桜庭一樹が直木賞を受賞した後、『砂糖菓子の弾丸は撃ち抜けない』(A Lollypop or a Bullet) (ライトノベル文庫版：(富士見ミステリー文庫)、富士見書房、二〇〇四年十一月、一般小説版の単行本：富士見書房、二〇〇七年十二月、以下、『砂糖菓子』)をはじめとして、多くの桜庭のライトノベル作品が一般小説のレーベルから再刊された。その中でも、桜庭の商業的成功作である『GOSICK』シリーズは元々少年向けレーベル(富士見ミステリー文庫)から出版され、後に少女向けレーベル(角川ビーンズ文庫)、そして一般小説レーベル(角川文庫)からも繰り返し出版された多面性を持つ作品である。山口直彦は『GOSICK』の三度の出版を比較し、修正されたのはほとんど体裁のみであったと指摘した。一般小説版では、ライトノベル的なあとがきや武田日向によるイラストが削除され、カズモトトモミによる「アリス風少女のシムレット」<sup>⑤</sup>を配した新たなカバーが作られた。また少女向け

版ではキャラクター紹介のページにイラストが追加され、表紙やイラストはわずかな修正のみが加えられ、イラストもほぼ修正されずに残されていた。つまり、『GOSICK』シリーズは本文がほとんど変わらず三つのレーベルから出版されたのである。山口はライトノベルにおけるイラストの役割を強調したが、『GOSICK』は何故ジャンルを越境することが可能であったのかという問題には触れていない。

桜庭一樹は二〇〇五年より、活動の軸をライトノベルから一般小説に移している。この点に関して、桜庭のライトノベルは最初から「少年向けライトノベル性」を持っていなかったのではないかという疑問が生じるかもしれない。桜庭の作品には同性二人組（恋愛関係に限らない）が登場するという特徴があり、それは少年向けライトノベルの固定したジェンダー秩序からの逸脱であると思われる。しかし作者によると『GOSICK』は違う。二〇〇六年九月の『野性時代』についてのインタビューで桜庭は、『GOSICK』の特徴について次のように述べた。

そのような読書歴もあってライトノベルの世界に入ったのですが、書いていくうちに自分の書くものはこのジャンルから逸脱していると感じ始めました。昔から暗くて生々しいところがある作風といわれてきましたが、一度ほんとうに生々しい『赤×ピンク』（03年）という本を出したら全然売れなくて（笑）、仕事として続けていくのなら、本当にライトノベル王道のヒット作を出さなくてははいけないと

編集者にアドバイスされ、ディスカッションを重ねて「GOSICK」（03・11年）というシリーズを出すことになつたんです。<sup>7)</sup>

また、同インタビューで桜庭は、「ライトノベルのお約束から逸脱した」作品を作る意志があつて、それを『砂糖菓子』に書いたと語った<sup>8)</sup>。このことから分かるように、少なくとも『GOSICK』シリーズは意識的に王道の少年向けのライトノベルを出すつもりで作られたといえる。

ところで、少年向けのライトノベルの「王道」とは何であろうか。一つに、前述したように男性読者を萌えさせる美少女キャラクターであると思われる。ただし、萌える美少女だけであれば、『砂糖菓子』や『赤×ピンク』（ファミ通文庫）、エンターブレイン、二〇〇三年二月）をはじめとして、桜庭一樹の作品にはほとんど登場する。実は、『GOSICK』が桜庭の他の作品と異なるのは、主人公が少年少女の二人組であるという点である。本文では、少年向けのライトノベルの王道とは異性愛規範だという仮説から『GOSICK』におけるジェンダーの（脱）構築を分析する。

## 二 ヴィクトリカにみる「少女像」

ビスクドールのように小柄で、うつくしく、同時におそろしい少女が、陶製のパイプをぶかぶかと吹かしながら立

っていた。

母親とそっくりの、長い見事な金髪が、太古から生きる動物の金色の尻尾のように、地面まで重々しく垂れている。エメラルドグリーンに輝く切れ長の瞳には、百年の時をすでに生きた老人のように、静かで悲しげで、同時にひどくつめたい光が瞬いている。

フリルとギャザーがたつぷりはいった、赤と白のタフタドレスに身を包み、ふつくらとふくらんだ姫袖は薔薇の蕾のよう。<sup>9)</sup>

ヒロインのヴィクトリカは聖マルグリット学園の図書館塔に籠る一四歳の美少女である。「知恵の泉」という非常に優れた推理力をもつて、シャーロック・ホームズ的な探偵役を演じた。前掲の引用から分かるように、ヴィクトリカはその美しさやファッションによって少女性<sup>10)</sup>が表されている。しかし同時に、恐ろしく、不気味な(非)人間のようにも描かれている。また、「百年生きた老人のように(中略)つめたい光が瞬いている」瞳に加え、「老人のような、しわがれた声」とも描写される。こうした錯綜したイメージは旧式な衣装によっても強調される。

『GOSICK』の物語は一九二四年に設定されているが、ヴィクトリカは「フリルとレース」に溢れるゴシック風のファッションに身を包む。つまり、ヴィクトリカの外見は時代的に逸脱しているのである。物語の中でそのファッションは旧式であるとしても、読者にとっては、一九九〇・二〇〇〇年代の日本

に流行したストリートファッションのゴシックロリータ(以下、ゴスロリ)に見える。

ゴスロリは西洋の一九八〇年代のゴスサブカルチャーの流れを汲み、ロリータファッションの「前近代のヨーロッパのデザイン」<sup>11)</sup>と、日本のヴィジュアル系ロックの暗い色と雰囲気を組み合わせて発生し、一九世紀のゴシック風の文学からいくつかのテーマを再現するサブカルチャーとして定着している。そして、『GOSICK』シリーズにみられる「ゴシック」の要素も、一九世紀ゴシック小説の直接的な模倣というよりは、ゴスロリと同様、現代日本に存在する、一九世紀のヨーロッパを空想する「日本的ゴシック」というべきであろう。<sup>12)</sup>

ヴィクトリカはその衣装やその美貌、さらに一般的に無表情であることから、人形(ヒスクドール)に似ていると描写される。人形はゴシックの主な記号の一つであり、高原によると「完全に主体性を放棄した」と解釈される<sup>13)</sup>。人形は人物像であるが人間ではないものである。したがって、人形と例えられるヴィクトリカは人間性が希薄で、不気味な存在として描かれている。しかも、ヴィクトリカの非人間性の表現は人形に留まらない。彼女は一度も授業に出席せず、学園の図書館塔に籠ることで、「金色の妖精」という怪談の奇妙な存在として学校で知られている。また、ヴィクトリカや彼女の母親をはじめとして、何人かのキャラクターは「灰色狼」とも呼ばれるセイルーン民族の血を引く。灰色狼は、獣に変身する怪物ではなく、感情の激しい時に野性的な性質が表れる。時折鳴き声が咆哮にたとえられ、

他のキャラクターに獣と呼ばれる人物である。だが、それとは対照的に、灰色狼達のもう一つの特徴が頭脳明晰さである。つまり、非人間だといっても、超人間だという風にも思われる。

今まで、ヴィクトリカが非人間として描かれていることを論証してきたが、その中でジェンダーは如何に(脱)構築されるのであろうか。ドールや妖精は少女性を強調するイメージだと思われる。また、恐ろしくて不気味な女も全く新鮮ではなく、逸脱する少女像ではない。さらに、性格や外見に動物・獣的な要素を持つキャラクターはライトノベルやオタク文化では山ほどあり、その野性的な女性性は萌えやフェチとして消費されることが多い。つまり、保守的なジェンダー表現だともいえる。

ただし、ヴィクトリカの場合は、「萌えキャラ」として構成されているとしても、その非人間性や野性はエロティックに描かれているわけではない。しかも、ヴィクトリカのジェンダーの構築にも矛盾が表れている。

前述した通り、ヴィクトリカは物語の中でホームズ的な探偵の役を演じる。聡明さに限らず、非社会的な性格や奇行を含めて、ヴィクトリカは人形のように小柄な少女によるホームズのパロディだといえる。さらに、ヴィクトリカはホームズと同じように、謎を解決するとき、パイプを吸い、煙に囲まれる。

『GOSICK』の文中において、パイプはヴィクトリカのジェンダーの両面性と関わるものとして表現される。

一弥は思わずショーウィンドウの一つに目が吸い寄せら

れた。華やかな店の中で看板もシックで目立たないが、それはパイプ屋だった。ウィンドウには陶製や鉄製、大きさもさまざまなパイプがたくさんと、それからパイプ置きが並んでいた。ガラスの靴のような小さなきらきらした女性用の靴が片方だけ、飾ってあった。それが翡翠でつくられた靴の形のパイプ置きなのだと気づくと、一弥は思わず店の扉を開けて、店員に値段を聞いていた。普段、無駄遣いせずに小遣いを貯めている一弥にとっては手の出ない額ではなかったのだ。迷わず購入することにした。

「女の子用なのでリボンをかけてください。あ、あの赤いリボン」

そう言うと、店員はパイプ置きに目を落として、

「……これをお女の子に？」

不思議そうな顔をした。<sup>(14)</sup>

引用から分かるように、店員は少女がパイプを吸うはずがなく、パイプ置きも少女にふさわしくないと思うのだが、一弥はヴィクトリカをよく知っているので、彼女がパイプ置きを喜ぶだろうと理解している。この場合、店員の考え方はジェンダー秩序を表象するが、ヴィクトリカはその秩序から逸脱する。一方で、このパイプ置きは「ガラスの靴のような小さなきらきらした女性用の靴」という形で、男性性も女性性も同時に表象するオブジェクトであり、ジェンダーの両面性を強調する。桜庭文学における少女像について評した榎本正樹は、「大人でも子

供でも男性でも女性でもない、しかしそのどれをも含むヴィクトリカは、本質的な意味で少女を体現している」<sup>(15)</sup>と解釈する。椀本の指摘は、少女は本質的に女性性を肯定するだけではなく、女性性も男性性も含む多様な可能性があると認めるものである。したがって、ヴィクトリカの崩されたアイデンティティは彼女の「少女性」を否定するのではなく、男性性も女性性も両方含む多面的な「少女像」を表しているといえる。

にもかかわらず、ヴィクトリカの衣装は少女らしさを表しながら、概念的な曖昧さをはつきりさせる。ゴスロリ・サブカルチャーの中で、愛好家達は衣装によって自分の主体性や少女性を表す。ただし、ゴスロリ・サブカルチャーが定着するのに伴って、メディアで一つの少女像の類型になり、オタク文化の中で男性読者の感情を移入させる萌えキャラの一つの類型にもなった。ゴスロリに含まれている「ロリータ」という言葉は、男性中心のオタク文化の中で「ロリータコンプレックス」と関わることが、ゴスロリサブカルチャーではその意味ではなく、空想上の西洋的な少女像として理解するべきである。その意味の曖昧さがヴィクトリカにも読み取れる。彼女は萌えキャラとして、「ロリータコンプレックス」の対象として読まれることもあるが、ゴスロリサブカルチャーの記号によって彼女の主体性や少女性が表現されていると読まれることもある。

そのうえ、ヴィクトリカの少女性は少年主人公の久城一弥との恋愛関係でさらに強調される。久城の視線を叙述する語り手はヴィクトリカの「長い金髪」と「さくらんぼ色の唇」とい

女性性の記号である美貌を賞賛する。このように、彼女はいわば少年向けオタク文化に溢れる美少女の一人として描かれる。さらに、彼女は頭脳明晰であるのに、体が虚弱であり、父親に誘拐され、久城に救われる「囚われた姫」の役も演じる。それもまた、保守的なジェンダー役割であるといえる。それに合わせて、ヴィクトリカは久城との関係の中で「可愛らしい」一面を見せることになり(図1)<sup>(16)</sup>、マカロンやクッキーなどのお菓子・甘いものに目がないところを含めて、ステレオタイプ的な少女性が鮮明にされる。



[図1]

このように、ヴィクトリカは一方で人間や少女の規範から逸脱することが強調されるが、もう一方では「可愛らしい」記号で「非常に少女らしい」存在としても構築される。しかも、ヴィクトリカの「少女性」は、男性読者の視線を重ねられた一弥との恋愛関係という、異性愛の性的ダイナミクスによつて構築される。

### 三 帝国軍人的な男性性を求める久城一弥

無口で堅物で、女性にはことのほか弱気な久城一弥は、誰にも見せたことのない意外な一面を持っていた。それは、家族にも友人にもぜつたいに秘密なのだが、一弥はじつは、かなりのロマンチストなのだつた。

真面目で賢い仮面の陰には、まだ見ぬ、美形な異性との素敵な出会いの想像なども隠れていた。一弥は密かに信じていた。(中略)

……そんなことを考えているなどと父に知られたら、恥ずかしいばかりか、男らしくないぞと往復ビンタを食らいそうだし、兄たちに知られたら三日三晩くらい笑われそうで、だからぜつたいに、家族にも秘密なのだが。<sup>(17)</sup>

主人公である久城一弥は極東の島国(日本)より聖マルゲリット学園に留学している一四歳の少年である。父親が軍人の家族で兄弟四人の最年少であり、真面目で成績優秀な学生である。

加えて、引用から分かるように、一弥は自分の男らしくないところを父親には隠すべきだと思ひ込んでいる。青木逸美によると、桜庭一樹の文学には「世界に立ち向かう2人組の戦う少女の系譜」という特徴があり、久城一弥も最初の設定では少女だった<sup>(18)</sup>。結局彼は少年として描かれたが、その可能性を前提に久城一弥にみるジェンダーの逸脱をいかに解釈できるだろうか。プロウ侯爵により武器として扱われ、連れ去られるヴィクトリカに対して、一弥は救いに行く騎士という役割を果たす。しかし、彼は少年向けライトノベルの英雄であるのに、他の登場人物に男らしくない少年と見なされる。一弥は二人の兄と父親よりも、姉や母親の方と仲が良く、「帝国軍人の三男として、責任がある」<sup>(19)</sup>と思ひ込み、父親から示された男性性のモデルに従うべきだという義務を引き受ける。

ところが、前述したようにその男性性に準じるために、一弥は自分の性格における男らしくない部分を隠す必要が生じ、さらには次の引用のように、捨てるべきだとさえ考えている。

——子供の頃のことだが、一弥がまだ声変わり前のあどけない声でこの歌を歌うと、母や姉が手を叩いて「一弥さんはお歌がうまい」だの「お父さまやお兄さまたちは歌えないのにね」などと喜んでくれたものだった。父や兄たちには歌っているところをみつきり、男らしくないと怒られてからは、一弥は一人のときでも鼻歌一つ歌わない男になつたのだが、久しぶりに歌っていると、だんだん興が乗つて

きた。(20)

「ロマンチスト」であることと「歌」は、久城家の父親にとつてはいずれも男性性と相容れない要素とされる。しかし、一弥は自分を恥しながらも密かに「ロマンチスト」であり続ける一方、「歌」に関しては、父親に怒られた後、「一人のときでも鼻歌一つ歌わない男になった」。「ロマンチスト」であることはまだ異性愛的な欲望と関わっているが、歌は本質的に違うのである。「声」自体は性別の記号だといえる。「声変わり」は思春期に起こる生理的変化の一つであり、完全な男性になる過程として解釈することができる。その一方で、声変わり前の少年は、「未完の男性」に過ぎないと解釈できる。つまり、父親にとつて、歌は女の趣味である上、子供の声で歌う一弥が自分の「未完な男性」性を強調していると思うのではないだろうか。それ故、ジェンダー秩序が厳しい久城家において、まだ「未完な男性」であった一弥は、恋愛に対する関心や芸術的感受性を含め、父親にとつて男らしくないと見なされる要素を全て抑圧するように育てられた。これらの点からも分かるように、一弥は帝国軍人的な男性性に合致するような振る舞いを自然に行っているのではなく、父様の承認を得るために男性性を強制的に求めさせられている。

一般に「泣き虫」や「怖がり」だと見なされる一弥は、シリーズ中、ヴィクトリカのワトソンとして暗殺や誘拐事件の調査に巻き込まれ、ヴィクトリカの退屈しのぎに、そしてヴィクト

リカを救うために冒険に出かけることになる。シリーズの完結編において、戦争がはじまる時期に、一弥は日本に帰国させられ、軍隊に入隊することになる。その時点で彼の変化が他のキャラクターから語られる。まず、『GOSICK VIII 上』の冒頭で、聖マルグリット学園の寮母は、昔の一弥は「しくしく泣きながらお姉ちゃんの名前をよく呼んでいた」が、現在の一弥は「ずいぶんちがーい、「大人」になってきた」<sup>(21)</sup>と指摘する。同様に、帰国してきた弟を見て、姉の久城瑠璃はその変化に気づき、昔の一弥と現在の一弥を別人として見る。

その瞬間、瑠璃は、まるで女の子みたいだった、泣き虫で優しくて素直な、ちいさな弟を、自分が失っていたことを悟った。

理由はわからないが……一弥はいつのまにかまるでべつの人間のようになっていたのだった。大人で、悲しそうで、そのくせ強情そうな、男に……<sup>(22)</sup>

ここで「泣き虫」、「優しい」、「素直」、「小さい」という性格は「女の子みたい」であると、反対に「大人」、「悲しそう」、「強情そう」は「男」と関連するように記述される。それに加え、父親も一弥の変化に気づき、現在の一弥は「立派な大人」「立派な男」になったと、「男らしい」一弥をほめ、「女の子みたい」だった一弥をけなす<sup>(23)</sup>。

久城家の中で瑠璃だけは一弥の変化に対して違和感を持って



いた。父親にとつて「男らしくなる」ことは大人になる過程の自然な流れであるが、それは違うのではないかと瑠璃は思い悩む。彼女にとつて、弟の変化は自然ではなく、苦勞の結果や強制的な決心だった。一弥自身は自らの変化の理由について、『GOSICK VIII 下』における姉への手紙の中で次のように説明する。

それだつて結局のところは、父さんのような大人が求める、  
ぼくたちの強さに繋がっていくんだつて。だつて、ぼくが  
成長しようと思つたのは、もつと力がほしいと悔しがつた  
のは、ただあの子のためだつたんだから。<sup>(24)</sup>

このように、シリーズの冒頭で一弥は父親の承認を得るために「男らしい大人」になるという義務を抱えたが、「男らしい大人」になれたのは父親の承認のためではなく、ヴィクトリカを守るためであつた。そして、次の引用から分かるように、ヴィクトリカも一弥の存在によつて少女性・人間性を手に入れた。

セシル先生が教師らしくつかつか近づいて、針を取りあげようとした。するとヴィクトリカは飛びあがり、狼そのものの声で、ぐるぐる……と威嚇した。

「だめよ。どうしてこんなこと！」

「これしか、方法がないのだ」

答えるヴィクトリカの声は静かだつた。聖マルグリット学園にやつてきてから、すこしずつ変わり始めた、ヴィクトリカの人間らしさ、時折見せる柔らかなかわいらしさが、一弥の存在とともにここから永遠に去つてしまつたようだつた。今朝のヴィクトリカは、最初に見た日と変わらないぐらい、感情というもののまるでない、ひんやりとつめたい横顔を晒していた。人に慣れない小さな獣、そのままに。<sup>(25)</sup>

ヴィクトリカの「少女性」は一弥の主観のみによつて見出されるわけではない。家族の愛を知らず孤独な人生を過ごしてきたヴィクトリカは、父親に武器として扱われ、兄に「(心の無い)機械人形」<sup>(26)</sup>や、「冷血動物」<sup>(27)</sup>と呼ばれ、アイデンティティの危機を経験した。ただし、一弥との関わりを通して、他人との交流、そして恋愛関係を体験することになり、ヴィクトリカの間として(それに少女として)のアイデンティティが確立される。一方で、引用から分かるように、彼がいなくなると彼女は人間的な感情を失つて、再び獣(非人間)のように行動することになる。すなわち一弥の男性性は、ヴィクトリカとの恋愛関係を通し、異性愛規範的なジェンダー秩序に回収される形で構築されている。同様に、ヴィクトリカの「少女性」もまた、一弥との恋愛関係によつて構築されているのである。

#### 四 性愛規範

『赤×ピンク』、『砂糖菓子』、『推定少女』、『少女には向かない職業』(ミズステリ・フロンティア)、東京創元社、二〇〇五年九月)と、『GOSICK』の連載時期に出版された桜庭の作品には女二人組が多く登場する。しかし、それらの二人組はほとんどハッピー

エンドを迎えていない。二人は離ればなれになる、一緒に殺人を犯し逮捕される、片方が死んでしまう等の絶望的な運命を辿る。その一方で、『GOSICK』で男女の二人組である一弥とヴィクトリカは一時的に離れて絶望に陥るが、物語の最後に再び一緒になって、二人で新大陸で新しい生活を始める。青木は「ヴィクトリカと久城の未来に絶望より希望が見えるのは、「騎士」が少年だったからなのかもしれない」<sup>(8)</sup>と主張する。前節までで確認してきた、「女の子みたい」な状態から「男らし」くなるという一弥の変化は、その解釈を補強するのではないだろうか。すなわち、一弥はヴィクトリカを絶望から救う騎士になるために、「女の子みたい」な性格を捨て、「男らしい」英雄になるべきだったといえる。同様に、「大人とも子どもとも男とも女ともつかない」非人間というように描かれるヴィクトリカは、一弥との関係の中で人間性・少女性が表れるようになる。つまり、異性愛規範の中で、一弥の男性性とヴィクトリカの少女性が互いに構築される。といっても、戦場に行った一弥はマッチョな兵士になったわけではなく、外交、暗号解読、報告などの、一般的に男性的と見なされることの少ない後方支援の仕事を担当しており、父親にけなされる自分の感受性は胸の奥にしまったままである。そして、ヴィクトリカは一弥との関係の中で可

愛らしいところを見せるが、しわがれた声や人形的な無表情など、人間離れた要素やジェンダー規範から逸脱するような記号が消えるわけではない。

『GOSICK』はライトノベルの保守的(男性中心・異性愛規範的)なジェンダー秩序の枠内で構築されているが、その秩序から逸脱する登場人物の要素が強調される。男女の主人公は異性愛規範的な恋愛関係になることが少年向けライトノベルの「王道」なのだとすれば、その中で主人公たちが定着したジェンダー秩序から逸脱することが強調されるからこそ、『GOSICK』はジャンルの壁を越え、一般文芸や少女向けライトノベルとして出版されることが可能になったと考えられる。加えて、桜庭一樹作品の語り手はキャラクター(特に少女キャラクター)の衣装を鮮やかに描写することが多い。こういった描写は、一方で萌えの要素として少年読者に消費されるのだが、もう一方でファッションに興味がある少女読者を引き付ける要素にもなり得るだろう。

しかも、『GOSICK』の少女や女性キャラクターのイラストは比較的エロティックではないと思われる。『赤×ピンク』や『砂糖菓子』など、他の桜庭一樹のライトノベルでは、少年向けライトノベルらしい少女・女性キャラクターの肉感的な挿絵がある程度見られるが、『GOSICK』の場合、女子キャラクターの肌の露出は比較的抑えられており、「エロい」というより、「カワイイ」として描かれ、さらに驚くシーンやアクションシーンのイラストが多く載せられるのである。しかも、

『GOSICK』は少女レーベルからも再版された唯一の桜庭一樹作品である。『GOSICK』という作品は、文章だけではなく、イラストも含めて、少女レーベルから出版された他の作品と並べても、何の違和感も引き起こさないのではないだろうか。

また、『GOSICK』のサブ・キャラクターには家父長制に抑圧される少女が複数登場しており、女性が抑圧から解放される手段として暴力に頼らざるを得ないというエピソードも繰り返し見られる。今後の課題として、主人公だけでなく他のキャラクターにも分析の幅を広げて、抑圧的なジェンダー秩序の問題について検討する予定である。

最後に、桜庭一樹は、少年向けのレーベルで作品を発表するに当たって、男性名義を選ぶ、すなわち女性であることを隠すという選択をしている。しかしその一方で、作品の作者紹介欄では「性別不明」と自称しており、性別に対しての曖昧さを強調している。つまり、桜庭一樹は、その名義を付けたことから、男性作者として「通用」するよりも、彼女はジェンダー秩序から逸脱する自分の矛盾した立場を強調してきた。桜庭一樹はその矛盾した立場をキャラクターに反映させ、ヴィクトリカや一弥を異性愛規範の中で構築するとしても、登場人物におけるジェンダー秩序からの逸脱を単純に改めるのではなく、最後まである程度維持して、キャラクターのアイデンティティの一部として取り入れるように描いているといえる。

【注記】

1 第一三八回直木賞に従って、榎本正樹は「少女」、「トボグラフィー」、

「家族」という三つの課題を中心に桜庭一樹文学について論じた。(榎本正樹「桜庭一樹論——少女／トボグラフィー／家族」、桜庭一樹「桜庭一樹く物語る少女と野獣」『角川書店、二〇〇八年七月、四九〜六二頁])

2 本論文ではライトノベルとして認識される出版レーベルから刊行された作品を指す。ライトノベルの一般的な概念は、いわゆる「一般小説」(純文学も大衆文学も含む)と対立し、文学よりマンガ・アニメ等のオタク文化に関連する小説である。

3 本論文では、広い意味でマンガ、アニメ、ゲーム等を含める若者向けの日本のポップカルチャーを指すが、狭い意味で男性中心のニッチを指摘する(注5を参照)。

4 「萌えとは作品のストーリーよりは、個々のキャラクターを主たる対象とする感情移入の形態であり、その移入の形態がデータベース消費などの議論を促した」(暮沢剛巳『キャラクター文化入門』NTT出版、二〇一〇年十二月、三三三頁)

5 「ゼロ年代では、オタクの定義自体「美少女に萌えること」となってしまう感がある」(前島賢『セカイ系とは何か——ポスト・エヴァのオタク史』ソフトバンククリエイティブ、二〇一〇年二月、三四頁)

6 山口直彦「春来る死神は幾度もやってくる——桜庭一樹『GOSICK』の復活劇」(柳廣孝、久米依子編著『ライトノベル・スタディーズ』青弓社、二〇一三年十月、一五七〜一七三頁)

7 榎本正樹(構成)「インタビュー 桜庭一樹クロナクル 2006-2012」桜庭一樹『道徳という名の少年』角川文庫、二〇一三年三月、八〇頁

8 前掲注7

9 桜庭一樹『GOSICK VII——「シック・薔薇色の人生——」』[角川文庫]

- 角川書店、二〇一一年三月、二三頁
- 10 本論文では、社会・文化的な文脈の中で少女らしいと見なされる要素の意味で「少女性」を使用し、作者による自立した少女の表象の意味で「少女像」を使用した。
- 11 松浦桃『セカイと私とロリータファッション』青弓社、二〇〇七年八月、三六頁
- 12 キングとフレザーは『GOSICK』を代表として日本の若者文化におけるゴシックの在り方について論じた。(King, Emerald L. and Fraser, Lucy (2017). "Girls in Lace Dresses: The Intersections of Gothic in Japanese Youth Fiction and Fashion" In Anna Jackson (Ed.), *New directions in children's gothic: debatable lands* (pp. 102-118) United States: Routledge.)
- 13 高原英理『ゴシックハート』立東舎、二〇一七年一月、二三七頁
- 14 桜庭一樹『GOSICK III——ゴシック・青い薔薇の下で』(「富士見ミステリー文庫」富士見書房、二〇〇四年十月、九四頁)
- 15 「桜庭一樹論——少女／トポグラフィ／家族」前掲、五二頁
- 16 桜庭一樹『GOSICKs——ゴシックエス・春来る死神』(「富士見ミステリー文庫」富士見書房、二〇〇五年七月、二一五頁)
- 17 『GOSICKs——ゴシックエス・春来る死神』前掲、一五〜一六頁
- 18 青木逸美「残酷な世界と戦う少女を描く桜庭一樹」(井上裕務編『別冊 オトナアニメ オトナラノノベ』二〇一一年三月号、洋泉社、四八〜五三頁)
- 19 桜庭一樹『GOSICK——ゴシック——』(「富士見ミステリー文庫」富士

見書房、二〇〇三年十二月、二二七頁

- 20 桜庭一樹『GOSICK II——ゴシック・その罪は名もなき』(「富士見ミステリー文庫」富士見書房、二〇〇四年五月、一九一頁)
- 21 桜庭一樹『GOSICK VIII上——ゴシック・神々の黄昏』(角川文庫)角川書店、二〇一一年六月、一〇〜一一頁
- 22 『GOSICK VIII上——ゴシック・神々の黄昏』前掲、二〇五〜二〇六頁
- 23 『GOSICK VIII上——ゴシック・神々の黄昏』前掲、二六三〜二六四頁
- 24 『GOSICK VIII下——ゴシック・神々の黄昏』前掲、八二頁
- 25 『GOSICK VIII上——ゴシック・神々の黄昏』前掲、一四八〜一四九頁
- 26 桜庭一樹『GOSICKs IV——ゴシックエス・冬のサクリファイズ』(「角川文庫」角川書店、二〇一一年五月、五三頁)
- 27 『GOSICKs IV——ゴシックエス・冬のサクリファイズ』前掲、八四頁
- 28 「残酷な世界と戦う少女を描く桜庭一樹」前掲、四八頁
- \*本論文で引用した『GOSICK』の作品はいずれも初版である。富士見書房の「富士見ミステリー文庫」による連載は二〇〇七年に『GOSICK』の第六巻と『GOSICKs』の第三巻で未完となり、中止された。二〇一一年に角川書店の「角川文庫」の再刊をきっかけに、『GOSICK』の第七巻、第八巻(上・下)、『GOSICKs』の第四巻の初版が発行された。この第四巻は(角川文庫)からしか出版されていないため、そこから引用した。(九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程一年)